

根岸 慧理子  
NEGISHI Eriko



蓮の池

岩絵具、絹目アートクロス

## 蓮の池

今回、改めて自分自身の制作を振り返ってみると、いろいろな作風があり、達成感を覚えると同時に、まだ迷いのある画風でもあるように感じた。そこで気づいたことは、自分が絵を描く動機が全て“好き”から始まっている事だった。何かを“好き”になる事は、周囲からの影響を受けている事も分かった。大学院に入学した当初は移り変わっていく他者と社会から影響を受けつつも、常に自分軸を持ち続ける事で、外界からの影響を最小限にする必要があると考えながら制作していた。その後、制作を続けているうちに、自分が絵を描く動機は全て“好き”から始まっているのなら、その“好き”という気持ちに着目してテーマを構築してもいいのではないかと考えるようになった。

実際、私は小さい頃からハイキングにでかけて自然に触れることが“好き”で、家族とキャンプへ行くこともよくあった。更

に母が植物の本を沢山持っていたので、その本を本棚から引っ張り出してはそれを眺め、それらの写真や絵をトレースして遊んでいた。さらに、外で遊ぶときには良く雑草を摘み取って家に持ち帰っていた。また、祖父母の家には少し広めの庭があり、帰省した際には様々な木々や草花などを眺めて楽しんでいた。こうした子供の頃の記憶と植物への強い興味を、今も持ち続けている事は紛れもない事実である。更に、これまでの私の記憶にある“好き”と結びついている経験の積み重ねがあったので、不忍の池を目にしたとき、これまでの記憶と重なった。今回、それがこの作品を描く動機となった。

最後に、この作品は、今後の制作における良い道標になったと思っている。現時点での“好き”の気持ちを大切に、作家として興味の対象が変化することに鋭敏に対応していきたい。